

◆受賞のことば◆

### アメリカでの現場体験からの学び

清水 潤子

(コミュニティ福祉学科 2008年卒業)

この度は、第4回研究実践奨励賞を賜りましたこと、心から御礼申し上げます。拙い文章ではありましたが、少しでもアメリカにおける難民支援の現状や、マイクロ・メゾ・マクロを行き来するダイナミックな学問であるソーシャルワークの可能性を、実感頂けましたら幸いです。

アメリカの難民支援の現場において、私が特に面白いと感じていた部分は、ソーシャルワークの実践に基づくプログラムを、どうデザインするかということでした。英語を母国語としない方々や、難民としてアメリカに渡ってきた方々へのメンタルヘルスの介入・予防プログラムや、ドメスティックバイオレンスの被害を受けた女性の支援プログラムを考えていたときに、メインストリームの人々を対象に作られたエビデンスに基づく介入が、私が今支援をしようとしている方々に有効であるという保証は無く、何が本当に彼らにとってベストな支援といえるのかについて問いを立て続けていました。フォーカスグループを開いてニーズ調査を行ったり、難民キャンプや母国でどんな治療・介入が行われているかを直接問い合わせてみたり、すでにどんな介入が有効であるかを論文などを検索して調べる一方、まだ効果が立証されていないパイロット事業への助成が少ないことや、希望のプログラムと現実にあるリソースとのギャップに悩むこともありました。そんな中で小さなステップに切り出し、トライ&エラーを繰り返しながらも、目の前にいる人の明日に変化を生み出すことを実践者として行ってきたことは、改めてとても貴重な経験だったと思います。

また、私自身がマイノリティとしてコミュニティの中に存在し、アイデンティティのレベルで安全だと思える居場所の大切さや、「聴く」以上に「訊く」力が無ければ、相互理解が進まないと肌感覚で体感したことは、とても大きな学びであったと感じています。

私自身、2018年の2月に勤務を終えて帰国しました。現在はNPOの中間支援組織に勤務し、社会的な課題解決を行っている団体の実践の可視化を進める評価のあり方を研究・研修したり、より良い社会を作っていくために、さまざまなアイデアやアプローチを実践家やアカデミアが協働して開発し、普及していけるような大きな資(志)金の循環を生むためのシステム作りを行っています。直接的に支援を必要としている方々と関

わる現場からは少し離れますが、ソーシャルワーク専門職としてのアイデンティティを強く持ち、社会システム作りに精進したいと思いますので、何かの折に皆様とお仕事が出来れば嬉しく思います。